



## 「前進あるのみ」の指導(下)

### 色紙に書いた人生訓

柏戸は現役中も、引退後鏡山親方になった後も一筆頼まれると決まったように「前進」と書いた。「結局いつもこれになってしまふな」と親方時代は苦笑いした。「気分を変えて他の言葉を考えてこともあった」というが最終的にはいつも「前進」だった。

現役時代の前に出ていく自分の取り口そのものだし「終わったことをクヨクヨ考えたって仕方ないんだ。人生だってそうだ。前向きに考えるしかないんだよ」とよく言っていた。いわば人生訓でもあったのだ。

その思いが「前に出ろ」という稽古場での指導に表

### 恐るべし黒船襲来

この場所、台風の目となったのが「黒船襲来」とも言われたハワイ出身、当時20歳小錦(西前6)の大躍進だった。「ブッシュ」

「ブッシュ」を自分に言い聞かせた恐るべき突き押し相撲。横綱隆の里、千代の富士を撃破し、14日目は綱取り場所だった大関若島津を倒し、12勝目を挙げた。これに単独先行していたの



が平幕西12枚目の多賀竜だった。この年5月、母を交通事故で亡くしたこともあって、「母の供養のために」と集中したのが奏功したのが美酒に酔いしれる多賀竜を囲む左から鏡山親方、セツ子夫人と多賀竜の優子夫人

1勝リードの13勝だった。千秋楽は小錦が大関琴風戦に勝ち、多賀竜が大関朝射撃に敗れたら、多賀竜VS小錦の「優勝決定戦」という図式だった。この場所、本割での対戦はなく、決定戦になれば小錦断然有利と誰もが思っていた。しかし

琴風は小錦の猛突っ張りをかいくぐるように潜り込んで、すくい投げに破り、多賀竜の初優勝が決まった。多賀竜は気が抜けたように朝潮戦は敗れ、13勝2敗の優勝となった。

### 高見山と違う存在感

小錦は外国出身者として昭和47(1972)年名古屋



師匠から弟子へ、感激の優勝旗

「乗っ取られるのでは」との恐怖感を大相撲関係者は感じ取った。実際、ベテランの相撲評論家は「どんなに強くても品格がない小錦を横綱にすべきではない」と一時論陣を張ったほど

### 国技の危機救う優勝

そうした面も含め、国技の危機を救った多賀竜の優勝でもあったのだ。師匠として鏡山親方は直弟子が平幕優勝を成し遂げたことは

本心に予想外だった。右からのおっつけが強力で、出し投げで相手の体勢を崩して寄る女人好みの取り口は本人が考え、磨いたものだった。

表彰式ではいつも同様、審判部長として土俵に上がり、春日野理事長が優勝賜杯を与えた直後、優勝旗を自ら手渡し、スポーツ紙は「柏戸涙の優勝旗」と一面で報じた。

育てた関取は6人。うち県出身者は3人(蔵玉錦、魄龍、鳥海龍)。青年親方時代、厳しすぎた指導がアダになり大器小沼が相撲をやめしてしまうアクシデントはあったが、その約6年後の快挙に「私は幸せ者」と喜びに浸ったのだ。

表彰式ではいつも同様、審判部長として土俵に上がり

|| 敬称略 ||  
(富樫 嘉美)

### 小錦阻止から37年

○:「ストップ小錦」の場所から37年たった。小錦は大関止まりだった。その後は横綱・朝青龍は休場中に故郷でサッカーをやり、師匠の言うことを全く聞かない問題児となった。白鵬は立ち合いの張り手や肘打ちまがいのかち上げ、さらに優勝インタビューの「万歳呼び掛け」などがあった。「勝てばいい」と考えがちな外国人力士に相撲の伝統

毎週火曜日付に掲載